

フィールドワークのための身体をつくる

— 「まち観帖」のデザインと実践 —

加藤文俊¹⁾，諏訪正樹²⁾

1. はじめに

フィールドワークという方法と態度は、どのように学ぶことができるのか。われわれは、まちを観察・記録し、意味づけしながら、まちについて語るための一連の動作を「まち観帖（まちみちょう）」としてデザインし、実践をすすめてきた。以下では、「まち観帖」の基本的な考え方を紹介するとともに、「まち観ことば」によって綴る「まち観がたり」の可能性について報告したい。

2. 「まち観帖」の構成

「まち観帖」は、筆者らの実践研究の中から生まれたもので、①まち歩きのための装備である「まち観房具」と、②まち歩きの体験を語るためのことばを整理し、49枚のハガキ大のカードにまとめた「まち観の型ことば」と、③「型ことば」を用いて綴られた「まち観がたり」によって構成されている¹⁾。

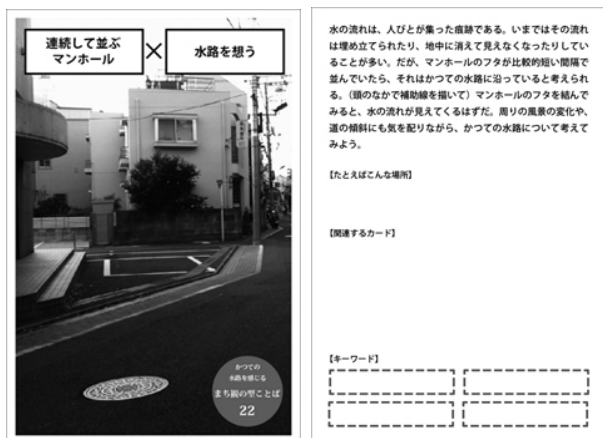


図1：「まち観の型ことば」（かつての水路を感じる：No. 22）

「まち観の型ことば」は、6つのカテゴリーに分類されており、たとえば「かつての水路を感じる」というカテゴリーには、図1のような「型ことば」（No. 22）がある。カードは「まちに存在するものや物理的空間的状况」×「それを観て／体感して、何を感じ、何を想い、どう行動するとよいか」という型で記述されており、これは「連続して並ぶマンホール」から「水路を想う」ようにいざなうカードである。

こうしたカードを数枚携えて、記述された内容と類似の状況を探索しながらまちを歩いてみる。カードに書かれたまちの見方・感じ方のヒントが、現場での直接体験と結びつくと、それは、まちを語るための「ことば」として修得されていく。

3. 「ものがたる」ことで身体が変わる

まち歩きを終えて、地図上に自分の歩いた軌跡とともに、「型ことば」を付記してみることで、まちへのイメージが広がる。一つ一つの「ことば」が、線あるいは面という、まとまりとして理解されることになる。

「まち観帖」をつくる過程で、筆者らはそれぞれが2本、合計4本の「ものがたり」を綴った。まちの今昔への想いが書かれたエッセイであるが、随所に「まち観の型ことば」に裏打ちされた記述が埋め込まれている。このように、フィールドで観察・体験したモノ・コトを「ことば」と対応づけ（身体に取り込み）、その上でふたたび「ものがたり」として世に問う（身体から外へ出す）ことで、フィールドワークのための身体づくりが促進される。

われわれは、「まち観帖」の着想から作成にいたるまで、1年ほどかけて、まち歩きと思考をくり返した。たとえば、その過程で、銭湯（煙突）やクリーニング店、蛇行する道などが、かつての水路の痕跡を示す手がかりになりうるものがわかってきた。ある日のフィールドワークで、われわれは、道の蛇行や周囲の様子から、古い建物の前で足を留めた。つぶさに観察すると、それは間違いなく銭湯の跡であった。煙突はすでに姿を消し、シャッターも下ろされた状態であったが、われわれの身体は、かつての水路の跡に敏感に反応していた。「型ことば」をつくりながら、「気づかざるをえない身体」（＝フィールドワークのための身体）が育ちつつあることを実感した。

4. 「まち観帖」による学び

「まち観の型ことば」は、まちを「観る」ためのコツを形式化し、分類したもので、「パターンランゲージ」として知られている試みと同様の問題意識に根ざしている²⁾。注意すべきなのは、49の「まち観の型ことば」だけでは、フィールドワークと

いう方法や態度を身体的に理解しえないという点である。単語を憶え、ボキャブラリーを増強するだけでは、実際に「ものがたり」能力を身につけることはできない。つまり、まちを理解し語るための「ことば」として考える以上、その「ことば」を紡ぐというプロセスや、結果として綴られる「ものがたり」こそが重要なのである。「まち観帖」をもちいた学びは、図2のような環状のプロセスを想定しており、その導入は、以下のような段階で活用される。

- ①他者の綴った「ものがたり」を読む → ②他者の「型ことば」に興味をもち、カードをえらぶ → ③えらんだカードとともに、まち歩きのための装備（まち観房具）を携えて歩く → ④自分自身の「ものがたり」を綴る。

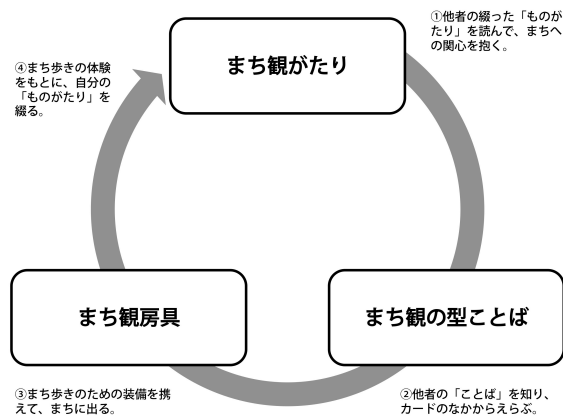


図2：「まち観帖」による学習プロセス

重要なのは、いきなり「ことば」を習うのではなく、まずは事例として、実際に「語られたまち」に触れることである。われわれは、他者が綴った「ものがたり」によってまち歩きへの関心を高めることが、「ことば」を学ぶ動機づけになると考えているからである。そして、まち歩きの経験を重ねながら、フィールドワークの方法と態度が体得されていく。このプロセスを経ることによって、さらに、以下のような学習が促されることを想定している。

- ⑤自分が綴った「ものがたり」を読んで（あるいは他者に読んでもらうことによって）、さらにまちへの関心を高める → ⑥自分であらたな「ことば」をつくって、カードの束を改訂・更新する → ⑦まち歩きのための装備も自分に合うように改良する → ⑧自分の「ことば」で自分の「ものがたり」を綴る。

これは、「まち観帖」によって構成される学習プロセスの「2 順目」以降に期待することのできる振る舞いである。つまり、筆者らが提案している49の「まち観ことば」は、人びとによって、現場で使われることによって、逐次書き換えられ、更新さ

れていく。カードの束は、閉じられた知ではなく、この「まち観帖」を手にして歩いた人びとが、ゆるやかに進化させていくものとしてデザインされている。その意味で、「まち観帖」は完成品ではなく、多様な意見を採り入れながら、変わり続けることを前提とした「半製品」だと言えるだろう。

今後は、ウェブなどを活用して、実際の利用者からのコメントやカードの改訂案、さらにはあたらしい「まち観の型ことば」の提案を収集・共有できるような仕組みづくりについて考えていきたい。

5. まとめ

「まち観の型ことば」として、一枚一枚のカードは独立しているが、一人ひとりがカードとともに歩いた体験が、一筋の「ものがたり」となって綴られる。どのカードをえらび、どのように組み合わせるかは、まさにフィールドでの体験を経ながら、身体感覚として培われていくはずである。フィールドワークに求められるさまざまなセンスは、非日常的な資質をもった「達人」だけのものではなく、ある部分はトレーニングによって獲得できる知であってほしい。「まち観帖」は、その一助となる道具と振る舞いの提案である。

一部の「型ことば」は「コミュニティのキャパシティ」というカテゴリーに分類されている。これは、やや抽象的ではあるが、近年、注目を集めている「シビック・プライド」³⁾という概念と関連づけながら、まちへの親近感や愛着について考える際に必要となるはずだ。われわれが綴る「まち観がたり」には、無形の文化的・精神的な価値を語る「ことば」も必要である。まちの「ものがたり」が継続的に綴られるようになれば、その読解をつうじて「まちの品性」とも言うべきものに接近することができのかもしれない。

引用文献

- 1) 諏訪正樹, 加藤文俊 (2012) まち観帖：まちを観て体感し語るための方法論, 人工知能学会第9回身体知研究会, SKL-12-04, pp.16-21.
- 2) クリストファー・アレグザンダー (1984) 『パタン・ランゲージ：環境設計の手引』 鹿島出版会
- 3) 伊藤香織, 紫牟田伸子 (監修) (2008) 『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』 宣伝会議

- 1) 慶應義塾大学環境情報学部 教授
《連絡先》 E-mail: fk@sfc.keio.ac.jp
- 2) 慶應義塾大学環境情報学部 教授
《連絡先》 E-mail: suwa@sfc.keio.ac.jp